

都道府県・ 指定都市番号	44	都道府県・ 指定都市名	大分県	研究課題番号・校種名	3 (5) 小・中学校
				領域名	校種間連携
研究課題	学校全体で取り組む研究課題 (5) 校種間の連携による教育課程の編成, 指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
学校名 (園児・児童・ 生徒数)	<small>ぶんごおおのしりつあさじしょうがっこう</small> 豊後大野市立朝地小学校 (94 人) <small>ぶんごおおのしりつあさじちゅうがっこう</small> 豊後大野市立朝地中学校 (59 人)		学校・地域の特色及び実態等 ・市指定「連携型小・中一貫教育校」 ・施設一体型校舎 ・コミュニティ・スクール		
所在地 (電話番号)	〒879-6222 大分県豊後大野市朝地町朝地 2030 番地 0974-72-0068 (朝地小学校) 0974-72-0067 (朝地中学校)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	http://syuu.oita-ed.jp/asazi/ (朝地小学校) http://tyu.oita-ed.jp/asazi/ (朝地中学校)				
研究のキーワード	「小中一貫教育カリキュラム」「言語活動の充実」 「伝え合う力の育成」「カリキュラム・マネジメント」				
研究結果のポイント	<ul style="list-style-type: none"> ○ 子供たちの9年間の連続した「学び」を進めるうえで、軸となる活動（伝え合う力）と各期における目指す姿を明確にしたことで取組を焦点化できた。 ○ 言語活動を意識した授業づくりに取り組んできたことで、児童生徒は多様な価値観に触れる機会が増え、自分の考えと比較検討しながら学ぶ姿勢が身に付いてきている。 ○ 生活科・総合的な学習の時間のカリキュラム編成が、系統性・継続性のあるものとなった。 				

1 研究主題等

(1) 研究主題

9年間の子どもの育ちを支える教育課程の編成と学習指導の展開

(2) 研究主題設定の理由

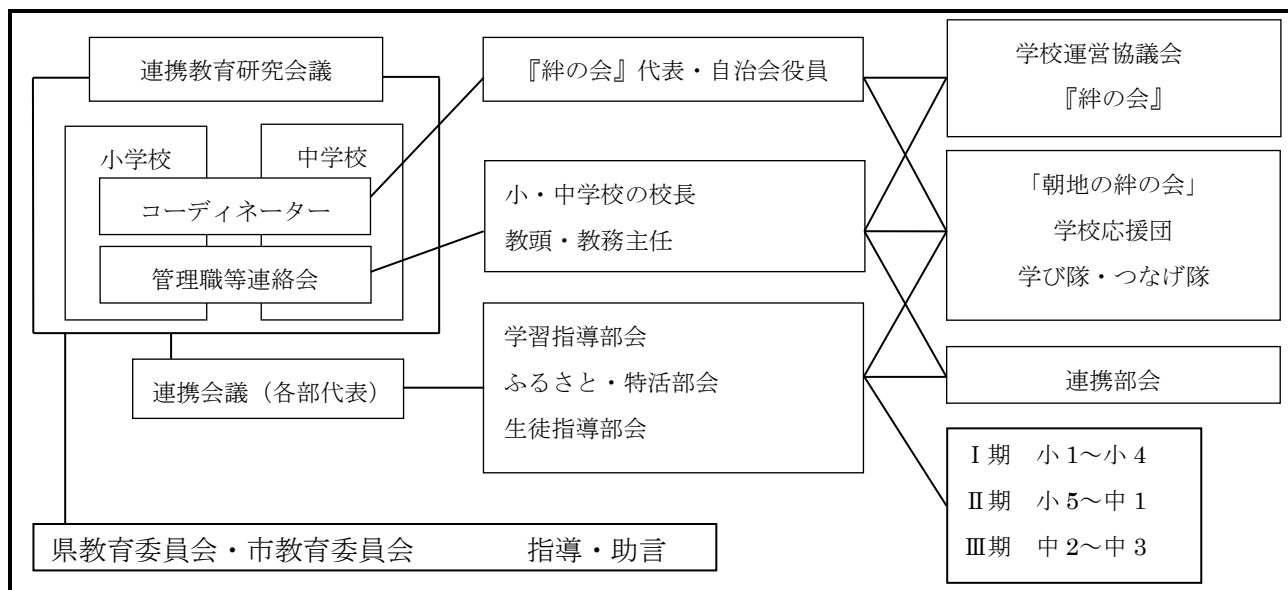
朝地小学校及び朝地中学校は、大分県南西部の山あいの地域に位置し、旧町内に小中ともに1校ずつである。平成16年の校舎移転に伴って小・中学校が施設一体型として建設され、平成26年度からは豊後大野市教育委員会の「連携型小・中一貫教育校」の指定を受け現在に至っている。

これまで、児童生徒の「学び」と「育ち」の系統性・連続性を図っていくために、小・中の教職員だけではなく地域・保護者と目指すところを共有し協働した取組を行ってきている。具体的には、小・中相互の乗り入れ授業や体育祭・文化祭等学校行事の合同開催、小・中PTAの一体化、学校応援隊の積極的活用などがあげられる。

しかし、学校評価（自己評価・学校関係者評価）等から、「周りの人と上手にコミュニケーションを取る」ことや「自ら考え、進んで活動する」ことを苦手とする児童生徒の課題が明らかになった。そこで、「伝え合う力」を核とした言語活動を取り入れた授業づくりを研究の中心に据え、9年間の連続した「学び」の質を高めていくことで、児童生徒の課題の克服に当たることとした。

検証の場として「総合的な学習の時間」を設定し、学年間の縦のつながりと国語科を中心とした横のつながりを重視した小中一貫教育カリキュラムを作成し実践することとした。

(3) 研究体制



(4) 1年目の主な取組

平成29年度	4月	連携教育研究会議・連携部会	研究推進への共通理解（目的・方向性等）
	5月	連携部会	各部会での取組・各期の話し合い
	6月	連携教育研究会議・連携部会 国研調査官学校訪問	互見授業の実施・各期の話し合い 研究の方向性の確認・全体研修会
	7月	連携部会・先進地視察	広島県呉中央学園視察・「伝える力」の全体研修
	8月	連携教育研究会議・連携部会	「総合的な学習の時間」の一貫カリキュラム作成
	9月	連携部会	各期の指導案審議・カリキュラム検討会
	10月	連携部会・研究授業会	授業研究会
	11月	連携部会・先進地視察	山口県鹿野小中学校視察・カリキュラム作成
	12月	連携教育研究会議・連携部会	互見授業・本年度の中間まとめ

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

○ 小中一貫教育カリキュラムの編成

9年間のカリキュラム区分を4-3-2として、その区分で育成を目指す資質・能力を学校の教育目標に照らして明らかにし、各教科の到達目標を区分ごとに設定しながら9年間の教育課程を作成する。作成の際には、教科ごとに9年間の系統性や継続性など、小中一貫教育カリキュラムの考え方を整理し、学習内容の配列の組み替えや単元構成の工夫等を行い、児童生徒の発達段階や実態により適した指導計画を立てていく。

○ 言語活動の充実

「伝え合う力」を核とした学習指導の工夫を、小・中の教職員が9年間の系統性を重視して実践する。具体的には、思考ツールやICT等の活用、学習形態の工夫を取り入れることによって、主体的・対話的で深い学びへとつなげる。

○ 家庭との連携協働

保護者と連携し「学びに向かう力の育成」や「家庭学習の充実」を図る。具体的には「家庭学習の手引き」を基に、学級懇談会において保護者間で学習の様子についての情

報交換の場を設定し、保護者を含めた家庭学習への意識向上を目指す。また、「連絡帳」や「手帳」を活用し、児童生徒とともに保護者も家庭学習の内容を把握できるようにする。

(2) 具体的な研究活動

○ 小中一貫教育カリキュラムの編成

ア 9年間で育てる「めざす子ども像」の共有化

- (ア) 小中連携アクションプランの作成。
- (イ) 各期で育成を目指す資質・能力の明確化。
- (ウ) 各教科・各領域の一貫構想図の見直し。

イ 「生活科」・「総合的な学習の時間」を核とした小中一貫教育カリキュラムの作成

- (ア) 学習内容を「ふるさと（キャリア）学習」「いのち（人権）」の2本柱として作成。
- (イ) 学年間の系統性と継続性の確保。
- (ウ) 国語科の学習内容の配列の組み替えや単元構成の工夫によるカリキュラム・マネジメント。

○ 言語活動の充実

ア 「あさじの6つの思考スキル」の定着

- (ア) 「伝え合う場」のある単元構成とする。また、指導案に明確に位置付ける。
- (イ) 授業形態の工夫（グループ学習・思考ツールの活用・協調学習・ICTの活用）。
- (ウ) 小・中互見授業の充実。

イ 小中一貫教育カリキュラムにおける「伝え合う場」の設定

- (ア) 期ごとの目指す「伝え合う姿」を4つの観点に基づいて整理した。（右図）
- (イ) 4観点を具体的な児童生徒の姿で明確にした。
- (ウ) 授業評価資料の作成。

ウ 学習ルール定着に向けた指導の工夫

- (ア) 「あさじの学びの約束」の見直し。

	I期	II期	III期
持つ	自分の考えを持つ。	多様な視点に立って自分の考えを持つ。	多様な視点と根拠を明確にして自分の考えを持つ。
聞く	相手の考えと自分の考えを比べながら最後まで聞く。	相手の考えと自分の考えの共通点や相違点を考えながら聞く。	相手の考えと自分の考えを比較し、共通点や相違点を整理しながら聞く。
話す	自分の考えを最後まで話す。	自分の考えを理由や根拠を明確にして話す。	自分の考えを理由や根拠を明確にして、相手に納得してもらえるように話す。
深める	いろいろな考えがあることがわかり、自分の考えに生かす。	相手の考えを認めながら、自分の考えを明確にする。	自他の考えを理解しながら、本質に迫る考えを導き出す。

○ 家庭との連携協働

ア 家庭学習への支援

- (ア) 家庭学習の手引きの見直しと配布。
- (イ) PTAの学年委員長部と連携をして、学級PTAにおいて「家庭学習について」の意見交換を毎学期実施。
- (ウ) 積極的な情報公開。

イ 曜日等で課題のパターン化（課題計画表を作成し計画的な家庭学習を支援）

ウ 「手帳」（中学校）を有効利用することで、子供自身が見通しと振り返りを行うことで自己管理能力を育成

3 研究の成果と課題（○成果●課題）

- はじめに軸となる活動（「伝え合う力」を意識した活動）や目指す児童生徒の姿を明確にすることにより、「国語科」と「生活科・総合的な学習の時間」においては、学年間の系統性・継続性を確保したカリキュラムを作成することができた。
- 「伝え合う場」のある単元構成や授業形態の工夫を取り入れた授業づくりに取り組んできたことで、児童生徒のコミュニケーション力が伸びてきている様子がうかがえる。また、自己の考えと他者の考えを比較・検討しながら学ぶ姿勢が身に付いてきている。
- 「連絡帳」や「手帳」の活用により、学校での学びを家庭学習につなぐとともに、「家庭学習の手引き」を基に保護者同士の意見交換の場を設定し、家庭と連携して児童生徒の学びを支えたことが、学習意欲の向上や学習時間の増加につながっている。
- 学年間の系統性・継続性を確保したカリキュラムを作成したが、児童生徒には学びのつながりが十分に意識されていなかったため、児童生徒が主体的に取り組めるための工夫（例：学習計画表等）をする必要がある。
- 「伝え合う場」の設定や授業形態の工夫を取り入れた実践を授業者の創意工夫により行ってきたが、取組に統一感がなかったため、整理した4観点をバランスよく育成することに課題が残った。授業のフレームを作成することで、4観点をバランスの取れた育成を目指す。
- 指導方法の工夫改善や家庭との連携による効果をより客観的に分析するための評価の在り方を検討する必要がある。
- 育成を目指す資質・能力や教育目標、それらに基づく教育課程の編成の基本方針などを、学校・保護者・地域間で共有し改善する仕組みを検討する必要がある。

4 今後の取組

（1）小中一貫教育カリキュラムの編成

- ・今年度作成した「国語科」のカリキュラムを参考に、学年間の系統性・継続性を確保した「算数：数学科」のカリキュラムを作成する。
- ・児童生徒が学びの系統性を意識し、主体的に取り組むための工夫をする。
- ・小中一貫教育カリキュラムの連続性と横断性について、教職員への質問紙の作成や児童生徒の記述物の収集により、資質・能力の育成との関連から分析を行い、評価・改善を図る。

（2）言語活動の充実

- ・各期の目標（資質・能力）やその実現を目指す指導の在り方を検証し、改善する。
- ・児童生徒が期ごとに設定した「伝え合う姿」を意識できるとともに、授業の在り方や視点を共有できるよう、授業のフレームづくりを行う。
- ・「伝え合う力」の確実な育成を目指し、振り返りを徹底するとともに、指導方法の工夫改善による効果をより客観的に分析できるよう、児童生徒質問紙等を作成・実施することにより指導方法の工夫改善を行う。

（3）家庭との連携協働

- ・家庭との連携による効果をより客観的に分析できるよう、保護者対象の質問紙等を作成・実施し、教育課程の作成や指導方法の改善に生かせるようにする。
- ・Ⅲ期で実施した「手帳」をⅡ期から実施し、早期から自己管理能力を育成し、学習意欲の向上につなげる。